

幻想のハラール

ハラール認証制度が日本の非ムスリムや在住ムスリムに与える影響

阿良田麻里子（立命館大学）

日本では、2012年以降、マレーシアのグローバル・ハラール・ハブ政策の強い影響のもとで、イスラーム市場への輸出を模索する食品関連産業や、レストラン・ホテル等のインバウンドツーリズム産業の間に、ハラール・ビジネスが注目されている。

東南アジア諸国のハラール認証規格は、そもそも容器包装食品のような工業製品や大規模なセントラルキッチンのある外資系のレストランチェーンのようなものを念頭に作られており、川上から川下まで厳密にハラール性を確保することを要求している。

現在の日本国内の状況では、このレベルのハラール性確保は困難であり、費用もかかる。日本では、数多のハラール認証機関が並び立っているが、それぞれ、有名な外国機関の規格を参照しこれを国内事情に合わせた形で採用したり、あるいはまったく独自の規格を作ったりして、監査・認証を行っている。

当事者の意識がどうであるにせよ、認証取得を希望する側からは、どの機関が最も権威があり、どの認証が有用であるのか、正統性が争われる状況が生まれている。特に有力なマレーシアやインドネシアの認証機関から相互認定を得るということは、広く非イスラーム地域の認証機関にとって他との差別化、権威付けの証となってきた。近年では中東の承認機関 GAC なども権威付けの役割を担い始めている[阿良田 2018 他]。

ハラール認証において世界を牽引する東南アジアの有力認証機関は、認証規格を明文化し、公表している。ハラールであるか否かの判断の根拠はイスラーム法に基づいてはいるが、規格そのものは ISO や HACCP などの食品衛生管理規格を参照しており、必ずしも宗教的な意味でのハラールと一致するわけではない。

家畜を例にとれば、たとえ野外で高所から落ちたりして死にかけた動物でも、息のあるうちにムスリムが神の名を唱えて喉の血管を切り、ザビーハ屠畜（イスラームの宗教的屠畜）しさえすれば、その肉はハラールである。一方インドネシアの認証規格では、ハラールな動物をザビーハ屠畜することに特化した屠畜場で、トレーニングを受けた屠畜人がザビーハ屠畜するが、その際、頸動脈・頸静脈・食道・気管のすべてを切ることが要求される。屠畜前の気絶処理や屠畜後の不動化処理を認めるかどうか、国によって異なる。

クルアーンに基づけば、神によって禁止されたもの以外は、すべてハラールである。しかし、認証制度というものは、その性格上、規格に則ってハラール性を確認したものだけを認証することになる。もちろん

それは、認証品以外が禁止されているという意味ではない。ハラール認証はハラールの一部に過ぎないということも、ハラールに対する解釈や実践に個人差がありうることも、最終的な判断は各信徒に任せられていることも、ムスリム社会では説明するまでもない常識である。

山下は、バリ・ヒンドゥーにおいて、共同体内部での実践を重視する「オーソプラクシー」から、教条重視の「オーソドクシー」へと重点が移行し、宗教が「持ち運び可能なもの」になっているとした[山下 1995]

同様なことがイスラームにおいても起こっている。しかし、信徒が日常的に宗教的な実践を行っている環境下では、たとえオーソドクシーが優越する状況が起ころうと、オーソプラクシーが無視されることはない。

しかし、日本でハラール・ビジネス・ブームが起こった時、非ムスリムの日本人の多くは、身近にムスリムの実践を見聞きもしたことの無い状態で、まずハラール認証とその重要性に関する情報にさらされることになった。注意深く読み解けば、ハラール＝ハラール認証ではないという情報は、ビジネスセミナーの中にも通常は織り込まれているのだが、「ハラール＝ハラール認証」という印象は、マスコミ等を通して拡散され、認証取得品やそれに準ずるものだけがハラールであるとする「幻想のハラール」ともいえるイメージが、日本人の間に広がる。これがさまざまな誤解につながる。ムスリムはハラール認証品しか食べないという誤解、ムスリム個人が日常的に自分でハラール性を判断する場面においても認証規格の要件を適用するという誤解、ハラール認証がとれないようなものはハラールではないという誤解など。

そして、まったくの善意から、給食などさまざまな場面で、非ムスリムの日本人が自主的に、ハラール認証に準ずる品以外のものにノンハラールやハラームと表示したり、訊かれてもいないのにムスリムに対してこれは食べてはいけないと指示したりする現象が起こっている。他者の視線が、ムスリムの実践における規範意識にも影響を与える。ハラールをめぐるイスラームの「オーソドクシー」が、一部のムスリムを介して偏った形で非ムスリムに伝えられた結果、日本国内のムスリムの「オーソプラクシー」が影響を受けているのである。

阿良田麻里子 2018 『食のハラール入門 今日からできるムスリム対応』講談社。

山下晋司 1995 「オーソプラクシーからオーソドクシーへ—現代バリ宗教論覚書」『宗教・民族・伝統—イデオロギー論的考察』、杉本良男（編）、pp. 39-54、南山大学人類学研究所叢書、5、南山大学人類学研究所。

キーワード ハラール 認証 実践 オーソプラクシー オーソドクシー